

長岡大学地(知)の拠点整備(COC)=長岡地域<創造人材>養成プログラム事業
2015長岡大学地域連携研究センターシンポジウム

人口減少時代と長岡地域活性化の方向—長岡地方創生への視点—

長岡大学地域連携研究センター

特集

長岡大学は、本学の「長岡地域<創造人材>養成プログラム」が平成25年度文部科学省「地(知)の拠点(COC)整備事業」に採択されましたが、昨年、このCOC事業の一環として、「企業競争力を支える<創造人材>の育成へ!」のテーマでシンポジウムを開催しました。



今年度は、引き続きCOC事業として、「人口減少時代と長岡地域活性化の方向—長岡地方創生への視点—」をテーマにシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、平成27年8月に実施した「人口減少問題等に関する全国市区町村アンケート調査」の結果を報告するとともに、長岡市地方創生総合戦略を推進している各界の方々を中心にして、下記の通り、人口減少問題の諸相を掘り下げ、今後の長岡地域の活性化方向=地方創生への視点について、討論しました。アンケートにご回答いただいた皆様にはあらためて感謝申し上げます。

当日は、約100名の皆様にご参加いただき、盛況のうちに終了することができました。感謝申し上げます。

*なお、第1部の基調報告は、本誌19～64頁に掲載しました。

記

- 1 名称 2015長岡大学地域連携研究センターシンポジウム
- 2 テーマ 人口減少時代と長岡地域活性化の方向—長岡地方創生への視点—
- 3 時期 平成27年11月20日(金) 14:30~17:00 *14:00~受付開始
- 4 会場 長岡グランドホテル(悠久の間)
- 5 参加費 無料
- 6 次第

総司会:長岡大学教授 原田 誠 司

第1部 基調報告 人口減少時代と長岡地域活性化の方向

長岡大学教授 鯉江 康 正

第2部 パネルディスカッション

テーマ:人口減少時代と長岡地域活性化の方向—長岡地方創生への視点—

パネリスト

大森木工株式会社代表取締役
 株式会社umariproデューサー
 株式会社北越銀行コンサルティング営業部副部長
 長岡商工会議所事務局次長
 長岡市市長政策室政策企画課課長
 長岡大学教授

大森 政 尚 氏
 栗原 里 奈 氏
 小柳 徹 氏
 長谷川 和 明 氏
 中村 英 樹 氏
 鯉江 康 正

コーディネーター 長岡大学地域連携研究センター運営委員長 原田 誠 司

- 7 主催 長岡大学地域連携研究センター
- 後援 長岡市、長岡商工会議所、財団法人にいがた産業創造機構、NPO法人長岡産業活性化協会
NAZE、北越銀行

2015長岡大学地域連携研究センターシンポジウム

主催者の開会ご挨拶

長岡大学教授
長岡大学地域連携研究センター運営委員長

原 田 誠 司



例年、当シンポジウムの主催者ご挨拶は、本学学長／地域連携研究センター長の内藤敏樹が行う予定でしたが、去る8月4日に心不全で急逝されました。享年70歳でした。ご冥福をお祈りします。現在、新学長の選挙中でありまして、学長不在ですので、地域連携研究センター運営委員長の私、原田が簡単に、ご挨拶申し上げます。

ご案内させていただきましたように、今年度は、国および長岡市の人口減少対策としての地方創生総合戦略も策定・発表され、地方創生スタートの年であります。「地（知）の拠点（COC）大学による地方創生推進事業」もこの地方創生の一環に位置づけられ、COC+（プラス）事業になっていくと思われまます。

本学も昨年来、人口減少問題に焦点を当てて、調査研究を行ってまいりました。そこで、＜人口減少時代と長岡地域活性化の方向＞をテーマに、本学の調査研究結果をご報告するとともに、長岡地域で地方創生を精力的に推進している皆様方にパネリストとしてご登壇いただき、地域創生の基本方向を議論していただきたい、と考えます。産官学金連携による地方創生の方向を示していただきたいと考えます。

それでは、開始にあたり、まず、お手元の配布資料をご確認ください。次第、第1部の基調報告資料、第2部のパネルディスカッション関連資料がございます。次第に沿って進めさせていただきます。

第1部の基調報告は、報告者の鯉江康正教授が全国自治体アンケート調査を行い、取りまとめたものであります。また、パネリストの皆様関連の諸資料があります。長岡市の地方創生総合戦略の概要など（長岡市政策企画課の中村英樹さん、大森木工社長の大森政尚さん）、「思いのほか」冊子（思いのほか代表の栗原里奈さん）、北越銀行の地方創生への取組み（北越銀行の小柳 徹さん）、長岡商工会議所の野菜クオーレ祭りと創業者クラブ案内（長岡商工会議所の長谷川和明さん）などがあります。ご確認ください。それ以外は私ども長岡大学のチラシ・案内等です。冊子については地域連携研究センターの年報ですが、昨年11月のシンポジウムのテープ起こしをしたものが載っております。本日のものもテープをとりまして、来年の第3号に掲載する予定であります。

本日のシンポジウムが長岡地域の活性化に貢献できることを願っております。よろしく申し上げます。

第2部 パネルディスカッション

2015 長岡大学地域連携研究センターシンポジウム

テーマ：人口減少時代と長岡地域活性化の方向
—長岡地方創生への視点—

<パネリスト>



大森木工株式会社
代表取締役

おおもり まさなお
大森 政尚 氏



NPO 法人思いのほか代表理事、
「移住女子」

くりはら りな
栗原 里奈 氏



株式会社北越銀行
コンサルティング営業部副部長

おやなぎ とおる
小柳 徹 氏



長岡商工会議所
事務局次長

はせがわ かずあき
長谷川 和明 氏



長岡市市長政策室
政策企画課長

なかむら ひでき
中村 英樹 氏



長岡大学
教授

こいえ やすまさ
鯉江 康正

<コーディネーター>



長岡大学副学長／
地域連携研究センター運営委員長

はらだ せいじ
原田 誠司



人口減少時代と長岡地域活性化の方向

— 長岡地方創生への視点 —

原田誠司 (長岡大学副教授)

これから、後半の第2部パネルディスカッションを始めたいと思います。進行役の原田です。よろしくお願いします。

議論のポイントは、「人口減少と長岡地域活性化の方向」のテーマを、副題の、「長岡地方創生への視点」を中心にしたいと思います。長岡市が10月に地方版総合戦略を発表しましたので、その考え方を報告していただいて、鯉江の報告から人口減少の影響等もアンケートから出てきていますので、それらを含めて長岡の活性化のあり方を議論したいと思います。

全体としては、3つくらいに分けて行います。最初にパネリストの方の自己紹介を一人1分くらいでお願いいたします。まず、長岡版総合戦略について政策企画課の中村課長から、内容をご紹介いただいて、そのポイントを議論したいと思います、これが第1です。

2番目に、地域活性化の事業・活動は様々ですが、長岡の活性化に必要な事業や方向は何か、について議論をお願いします。3番目に、長岡市の場合にはくながおか・若者・しごと機構を12月に発足させ、地方創生を推進するとのことですが、若者を中心のこの組織が、当面どのような活動をすべきか議論したいと思います。

最後に会場の方から、ご意見があれば受けたいと思います。

それでは最初に自己紹介ということで、皆さんから向かって私の左、大森木工代表取締役の大森さんから順次お願いします。

●地方創生は地方が元気になること! わかもの会議でがんばる

大森政尚 (大森木工株式会社代表取締役)

皆さんこんにちは。私、大森木工の代表取締役、大森政尚と申します。創業105年の会社でございまして、私は生まれも育ちも長岡です。木工製品全般に扱っております。正確な家具、建具を製造していますが、特注家具・建具、店舗設計、施工管理、内装仕上げ工事まで、業務

を拡大させています。

地方創生との関係では、現在、くながおか若者会議に参加し、居場所づくりのプロジェクトリーダーをさせていただいております。他には、有志による長岡市内の月1回ごみ拾い活動なども行っています。

今年度、長岡市が開始しました、くながおか仕事創造アイデア・コンテストの【いいね! アイデア部門】の審査委員長もさせていただいております。11月29日にアオーレ長岡で、公開審査・プレゼンテーションがありますので、是非お時間のある方は見に来ていただけるとありがたいと思います。

業界関係では、私は昨年まで、全国建具組合連合会青年部の会長をさせていただきました。全国から見た視点と地元長岡の視点をもってきましたが、全国いろいろ歩かせていただきました。ほとんどが地方だということがよく分かりました。地方創生のはじまりは何かといたら、やはり地方が元気になることです。私は長岡から発信するという気持ちでいまここに座らせていただいております。本日はよろしくお願いいたします。

原田 どうもありがとうございました。それでは「NPO法人思いのほか」代表理事、「移住女子」の栗原さんお願いします。

●長岡の食文化を発信! 移住女子の活動を全国に!

栗原里奈 (NPO法人思いのほか代表理事、「移住女子」)

ご紹介いただきました「NPO法人思いのほか」で、さらに「移住女子」という活動も行っております栗原と申します。「NPO法人思いのほか」という団体は、長岡の農業と食をプロデュースする団体です。長岡の食文化というものをとらえますと、酒もありますし、長岡野菜という伝統野菜もありますし、郷土料理は各地域にあります。広域にわたった、海、山、川がそろった長岡だからこそ発信できるものがあるのではないかと思います。そういったものをイベント、また観光に繋げていって、観光産業と

して長岡を盛り上げていけるように、「NPO法人思いのほか」としてがんばっていきたくと思っていますところでは。

また、「移住女子」というのは、今回ご紹介する予定はないのですが、名前の通り新潟に移住した女性、中越地域に暮らす移住女子4人が集まりまして、中山間地域の魅力を発信したいという思いから、<ChuClu(ちゅくる)>というフリーペーパーをつくっております。ペーパーで、中山間地の暮らしの豊かさを発信しております。首都圏や新潟、長野にも配布させていただいております。

今度、12月12日に、東京で全国移住女子サミットを開催します。全国から移住して活躍している女性をあつめまして、サミットを開いて、私達は「移住女子予備群」と呼んでいるのですが、東京に住みながら地方に移住したいと思っている女性方を集めて、一緒に交流しながら、地域の豊かさ、暮らしの豊かさというものを伝えるイベントです。先日、石破地方創生大臣と会食をさせていただいたのですが、このサミットにも興味を持っていただきまして、地方活性化の1つとして「移住女子」の活動が全国に広まっていくのではないかと期待も持ちながら今後活動していきたくと思っています。

また、私は長岡の総合計画策定委員のメンバーでもありまして、この総合戦略にも少し関わらせて意見をさせていただいたところでは。今回、一市民として意見を述べさせていただきながら、私の経験も踏まえながら、皆さん何かご参考になる点があればと思ひまして、がんばりたいと思います。よろしくお祈いします。

原田 どうもありがとうございます。それでは株式会社北越銀行コンサルティング営業部副部長の小柳様お祈いします。

●地方創生戦略チームで地方創生を支援!

小柳 徹 (株式会社北越銀行コンサルティング営業部副部長)

日頃、大変お世話になっております北越銀行から参りました小柳と申します。私がいま所属している部署は、コンサルティング営業部ともうしまして、通常法人様向けのコンサルティング関係の仕事もしくは支店単位ではどうしても取扱仕切れない大口のご融資の案件等を取りまとめているような部署です。この地方創生に関

しては産学官金ということで、金融機関も参加するというところから、私が所属しているコンサルティング営業部内に地方創生戦略チームという専門部署を立ち上げてお祈いまして、各自治体の支援をしているところでは。本日はどうもよろしくお祈いします。

原田 どうもありがとうございます。それでは次に長岡商工会議所事務局次長の長谷川様お祈いします。

●人口減少問題に取組み長岡の企業、経済の活性化を!

長谷川和明 (長岡商工会議所事務局次長)

ただいまご紹介いただきました長岡商工会議所の長谷川と申します。よろしくお祈いします。商工会議所は会員組織の経済団体でありまして、いま会員数は約2,300の企業と個人事業主を含めて組織されています。周辺の地域には商工会という組織もありますので、主には旧長岡市エリアの企業が会員ですが、それ以外の方も入っていただき組織されています。

商工会議所の目的としては、地域の企業の発展と地域経済そのものの活性化という大きな使命があります。今日のテーマである人口減少の問題についても全ての産業にとって大きな課題だろうということで、今年の夏前に10の部会が業種別に組織されているのですが、そこでの共通のテーマということでこの点について協議・議論させていただいて、その意見をとりまとめ、実は長岡市長に要望させていただいたところでは。また、その内容については後ほどお話ししたいと思いますが、そういう意味では今後経済界を考える上でも非常に重要なテーマですので、今日は多くの会員さんがいらっしやるので、言葉を選びながら発言していきたくお祈いします。今日いただいたヒントの中で事業に活かしていけるものがあれば次年度以降取り組んでいきたくお祈いします。

原田 どうもありがとうございます。それでは長岡市市長政策室政策企画課課長の中村さん、よろしくお祈いします。

◎人口減少問題には長岡市全体で取り組む

中村英樹 (長岡市市長政策室政策企画課長)

どうもはじめまして、長岡市役所から来ました政策企画課の中村です。私の方は、まだ人生を語れる歳ではありませんが、平成2年に26歳で市役所に入所いたしました。今年が26年目です。私どもの政策企画課のなかで、今回テーマである人口減少問題ということで、長岡市役所全体にかかる取り組みですが、そこをまとめているというところで、私が呼ばれたのかなというふうに思っております。これから貴重な時間のなかでいろいろ皆さんと議論させていただければと思っております。よろしく願いいたします。

原田 どうもありがとうございます。それでは、先ほど基調報告していただきました長岡大学の鯉江さんお願いします。

◎人口問題に取り組む地域活性化を!

鯉江康正 (長岡大学教授)

長岡大学の鯉江です。先ほどはどうもありがとうございました。専門は地域経済学という分野でして、ここ10年くらいは北陸新幹線の地域への経済的影響というものを追いかけてきました。それ以外に皆さんと関わりがあるのは、長岡花火の経済効果という??もやっております。

ここへ来て、新幹線が3月に開業して、予想通りというか予定通り金沢の一人勝ちになっているわけで、上越新幹線沿線も元気にしていかなければならないということで、これからしばらくは人口問題等を研究してみたいというふうに思っております。

それと、最後にちょっと言わせていただきましたが、まちの駅を利用した地域活性化というのは学生と一緒にやっていきたいということで、総合戦略も若者を中心に据えて考えていくということになっていますので、是非うちのゼミ生にも活躍してもらいたいと思っております。今日はよろしくお願いします。

原田 どうもありがとうございます。それではさっそく、第一クールということで、長岡市の総合戦略について中村課長から10分ほどで御

説明お願いしたいと思います。よろしく願いします。

◎地方版総合戦略は東京一極集中の流れの反転をめざす計画!

中村 それでは私の方から長岡市の考えている地方創生のポイントを説明させていただきます。お手元の総合戦略の概要をまとめた資料をご覧ください。長岡市の、現時点で考えてきた、あるいはこれから目指していこうとする地方創生の取り組みについて概要を説明させていただきます。

皆さんご存じの通り、人口減少問題というのは、ここ数年地域でお住まいになられていて、あるいはいろいろなところでそういう印象をお持ちだと思います。私ども市役所の仕事として、人口減少問題がクローズアップされてきたのは、昨年(平成26年)の5月前後くらいでした。ご記憶にあるかもしれませんが、東京一極集中の問題が掲載され、消滅可能性都市が大量に出てくるという記事が、地方紙、全国紙に限らず掲載されました。

その頃から国の動きがかなり急ピッチで始まり、今回のこの地方版総合戦略策定に至ったわけです。長岡市はこの10月に、長岡版総合戦略=「長岡リジュベネーション」を策定しました。この計画は、必置計画ではないのですが、国の方が全国をあげてこの人口減少問題を解決していくために、都道府県、市町村に対して、地方版総合戦略をつくって取り組むことを奨励しました。ここが出発点です。

昨年の夏前くらいから、長岡市でも、市長以下、将来の長岡像について、議論してきました。今までの様々な計画、例えば福祉関係とか、教育関係とか多くの計画がありますが、今回のこの計画の特徴は、東京一極集中を国としても是正する、全国各地にいわゆるダム機能をもつなかで、人口の流れを地方に向けていこう、という点を最大のポイントにしています。

したがって、今回の地方創生の地方版総合戦略は、細かいいろいろな課題・施策等がありますが、長岡全体をとらえてこの先取り組んでいく方向を示した計画であるのご理解いただければと思っております。

●**独自の命名「長岡リジュベネーション」で関心をもってもらいたい!**

中村 長岡版総合戦略は、「長岡リジュベネーション」という名称をつけさせていただきました。これについては、いろいろなご意見がありました。最終的にはこの名前にさせていただきました。

「リジュベネーション」という言葉は「若返り」の意味ですが、長岡全体のまちとして、常に持続性をもつという思いをこめております。2つ目には、より多くの方に関心を持っていただきたいと思って独自の名称をつけました。若い方を含めて「長岡リジュベネーション」という名前が何を言っているのかということを含めて関心を持っていただきたいという思いから、名前も一般的な名前ではなくて、長岡独自の名称をつけさせていただきました。

●**長岡元気回復の第1の柱は若者主役=若者に将来の長岡発展のエンジンになってもらいたい!**

中村 「長岡リジュベネーション」の特徴、考え方の出発点で議論されたのが、この人口減少問題が、誰に大きく影響する問題なのか、ということですね。本日は学生さんも参加していますが、まさに、10年先、20年先に成果が出てくる。ですから、議論の最初の段階で、いかに若い方の問題かということを知っていただき、長岡の良さを知っていただき、それで10年、20年先に、さらに長岡を発展させていく人材あるいはエンジンになっていただきたい。そのために、現役あるいは経験豊かな世代が若者を応援する。そういうことで、若者の皆様から主役になって欲しいという考え方を大きく1つ目に打ち出しています。

●**第2の柱は人材育成=米百俵の精神の実現を!**

中村 2つ目は、長岡には「米百俵」の精神がありますので、やはり人材を育てること、将来に向かって支援していくことですね。未来に向けた投資戦略という観点から、特に教育を大きな柱の2つ目としています。

●**第3の柱は産業振興=既存産業・起業等「働く場」を確保する!**

中村 3つ目は、人口減少問題への施策の効果は、多分1年や2年で出てくるものはないと思っています。息の長い、持続性のある政策をずっと続けていくことによって効果が出てくると考えております。そのなかでも、「働く場」がなくては、生活できません。企業誘致であったり、起業がクローズアップされますが、現在地元でがんばっている企業、地元の産業を継続・発展させる必要があります。仕事場の確保として、地元産業の支援、企業誘致、起業支援が3番目の柱であります。

●**7つの戦略分野で推進を!**

中村 トータルで、10年、20年の長いスパンの政策を展開していく。ただし、ここで矛盾が起きます。この計画期間は、5年間です。今回の計画は、今年度を含めて5年間で区切ることになります。しかし、長岡市は、10年、20年先を見据えた展開をしていきたいという思いをこめてつくっております。

大きい柱はいま申し上げた3つですが、より具体的には、7つの大きな分野に分けた戦略からなっています。第1の戦略は、「若者定着」です。長岡には、3大学1高専・15専門学校があります。これは地方都市においては非常に恵まれている環境です。その環境を活かした若者の定着を図る。第2の戦略は、「子育て」環境の整備ですね。第3は、「教育」ですね。そして第4は、「働く」ですね。産業であったり農業を含めた中で働く。第5は、「交流」です。定住だけが今回の人口減少問題ではありません。11地域からなる長岡市のそれぞれの地域にはいろいろな資源があります。また、県外、国内外、様々な方から長岡という地方都市を分かっていたなかで交流を推進していく。第6は、「安全安心」です。長岡市で生活するうえで、安全・安心でなければなりません。最後第7は、「連携」です。近隣・関係市町村や都市圏との広域連携など多様な連携が不可欠になります。

●**ながおか・若者・しごと機構を先頭に進もう!**

中村 最後に、ながおか・若者・しごと機構の資料も配布されていますが、12月に設立します。学び、暮らし、仕事、魅力づくりなどを若者と産官学金の連携で、総力をあげて推進します。ここにおられる学生、若者の皆さんにぜひ参加していただきたいと思います。

以上、簡単ですが、長岡版総合戦略＝「長岡リジュベネーション」の概要のご紹介を終わります。

原田 どうもありがとうございました。それではパネリストの方に、それぞれの立場でこの創生戦略については関わられておられると思いますので、これについての感想あるいは提案なりがありましたら。なるべく短めにお願いします。それでは大森さん。

●**若返り戦略のイメージを!-アートのまちづくりなど-**

大森 長岡には、3大学1高専15専門学校、ほかにも高校を入れるともっとたくさんの学校があります。高校生の場合、県外に出られる人が多い。3大学1高専15専門学校の学生は、昼間は長岡におり、多くの方が市内に住んでもいる。若い人が集まっているなかで、若返りを考えたときに、各学校、学生の特徴を活かした活動を展開する。例えば、長岡造形大学はデザインの学校ですから、学生が参加して長岡駅前を全てアート化してしまう。長岡はアートのまちだということで、アートに興味がある子ども達がさらに集まってくる。

また、長岡技術科学大学は、外国人学生が全国一入学するような学校ですから、その方々をいかに長岡市で起業するか。その環境を創る。そういう新しい価値観を広めることが若返りの戦略ではないかと思っています。

若者らしい意見を言いますと、やはりオシャレ、カッコイイ、カワイイといったキャッチーな言葉に繋がることになれば良い。オシャレなおじさん、カッコイイおねえさん、カワイイおばさんというように。そういったような若い方の意見に耳を貸していただくことが、若返りのはじまりではないかと考えております。

原田 大森さんは、ながおか若者会議でどんなことをされていますか。

●**10代～30代の若者50人が若者会議に参加**

大森 先ほどから、「ながおか若者会議」という名称が出ていますが、長岡市市長政策室政策企画課の若者・しごと機構の若者会議の活動のことだと思います。10代から30代までの学生、経営者、NPOなど50名ほどが参加して活動しています。5グループに分かれて、酒と食、農業活性化、子育て支援、若者の居場所づくり、企業と人・若者のネットワークづくりに分かれて、活動しています。私がプロジェクトリーダーをしているのは、そのなかの若者の居場所づくりというテーマです。まだ出すには少し早かったのですが、昨日も若者会議がありました。皆さん本当に何がやりたいのかと聞いて、何がしたいか、自由な発想で議論しております。

本当にまじめな話をしてもいるのですが、もうちょっと暗くやりましょう、というのをこの前題材にしてやらせていただきました。こんなところでいいですか。いまのところはこの程度にさせていただきます。

原田 具体的には後でまたお聞きしたいと思います。それでは次に栗原さんお願いします。

●**長岡の思いをいかに東京に届けるか、情報発信をどうするかが問題!**

栗原 私はいま29歳で20代なのですが、若者会議にも出席しておりますが、そのなかでも比較的若い方ではないかと思っております。この総合戦略を最初に公になる前に拝見したときから、若者に寄り添っているな、若者のことを考えてくれているな、と思いました。中村さんからは、若者を中心にしたものではなくて、長岡の若返りなのだという話も冒頭ありましたが、私の印象としては、若者に寄り添ってくれていると好印象を感じました。

ただ、こういった施策はいろいろと言いたいことはあるのですが、戦略としてはすばらしいものなので、それを主な施策としていったときに、どういうふうに出発していくかが重要だと思います。良いことをしていても、やはり人に知られないことには、それを魅力に感じていただけません。特に地方創生でやろうという総合戦略、東京一極集中を打開するために地方に人を呼びたいと言っているのに、こういった情報

が、そういった東京の人にも届かないと、なかなか長岡の若返り戦略はうまく歯車が回っていないのではないかと感じました。

●移住女子のネットワークを創る!

原田 どうもありがとうございます。それとの関連で、先ほど12月に移住女子のサミットをやられるということをおっしゃったのですが、これは、7つの戦略でいうと、移住女子というのはどこに入りますか。

栗原 移住女子は、若者定着と交流というところにあたると思います。私が活動している「思いのほか」もそうなのですが、それも「働く」と「交流」にあたります。いまは縦線で分かれています。一緒にできる場所もあるのではないかと。そういった点も施策の中で感じるところです。

原田 移住女子は、最初に栗原さんにお会いしたとき私は全然知らなかったのですが、興味を持ったのですが、いま何人くらいの方で活動されているのですか。

栗原 いまは少人数で、4名で動いております。

原田 長岡だけではなくて、県内のネットワークを持っているのですか。

栗原 新潟県に3人、長野に1人の合計4人なのですが、全国移住サミットをきっかけに、今後全国に移住女子のネットワークを広げていって、女性達の豊かな暮らし方、地方での暮らし方もできるというのを発信していきたいと思っております。

原田 非常にいい事業ですね。がんばってほしいと思います。それでは次に小柳さんお願いします。

●自治体と連携協定 - 金融から産業振興全般への取組へ -

小柳 銀行がどうして地方創生なのか。私どもは地域金融機関として、銀行も一企業として繁栄するところから、地方創生に真剣に取り組むことこそ地域金融機関が生き延びることなのだという考えのもと、私ども金融機関として地方創生に参画させていただいているところです。

また、いまさら私がお話しするべきものでも

ないのですが、国が提言している地方創生というのは、いわゆる金太郎飴ではなくて、新潟県には新潟県をはじめとして31の市町村があるわけですが、その31の市町村が独自の色を出して政策を進めていくことによって人口減少に対して歯止めをかけていきたいと思いますというのが本当の意味での地方創生ではないかと考えています。

そこで、私どもは、実は、昨年大きく発表させていただいたのですが、昨年10月に長岡市とはこの地方創生に対して全面的に一緒になってタッグを組んで取り組んでいきたいと思います。いままではどうしても私たち金融機関と行政の皆様との間柄は、いわゆる財政を預かる、市税を運用させていただいたり、金融面のお金のことしか関わり合いがなかったのですが、この地方創生を機に、企画の面であるとか、いまは子育て、支援のこととか、まさにやらなければならない産業振興といった面について一緒になって取り組んでいるところです。

これも口幅ったい言い方なのですが、地方公共団体は、クルマでたとえるならばエンジンであり、そのエンジンを正確に動かすためにはどうしてもオイルが必要でして、そのオイルが私達金融機関でありたいというところで一緒になって支援させていただいているところです。

原田 北越銀行さんはいろいろやられております。後ほど、ご紹介ください。それでは、長谷川さんお願いします。

●大都市部への魅力発信で人をよぶことが第1!

長谷川 先ほど、商工会議所内部の部会で人口減少について議論したと申しましたが、何が課題なのか。当然、人口減少にともない市場規模が縮小していくので、ものが売れなくなる、そして労働人口が減っていくから人材確保が難しくなるという話がありました。

ではどうするのか。本当にいろいろな意見が出ました。若者の人口流出を止める、U・Iターンを促進する、U・Iターンのため企業誘致をする、創業を支援する、さらに働きやすい職場環境をつくる、女性が活躍できる環境をつくる、子育て支援を充実させる、等々様々な意見が出ました。

しかし、会員は企業経営者の方ですので、日々

の仕事のなかですでに、いろいろな判断をして進んでおられる。また、人口減少問題は、中村課長が言われたとおり、成果が出るまでは相当な時間がかかります。議論はできても、なかなかうまくまとめられないという感じがしました。

たとえば言うなら、生活習慣病みたいなもので、人口減少といっても、来年いきなり2割3割減ったり、3年後に半分になるということではない。病気と一緒に、明日明後日死ぬわけではないけれども、このまま放置しておくといつか問題になりますよという問題なので、議論、集約が難しいテーマです。そんななかで最終的にまとめたのは、やはりUターンを促進しよう。そのためには長岡というところがもっと良いところだということの特に東京なり県外に出て行った子ども達に伝える必要があるだろう。その努力が少し足りないのではないかという話にまとまりまして、その辺の魅力を、企業の魅力ももちろんですが地域の魅力をもっと発信していくべきではないかということで、その点を要望させていただきました。要望した以上、行政の皆さんと一緒にやりましょうということになりました。

●戦略4「働く」の魅力を発信し戦略1「若者定着」へ!

長谷川 先ほど示された総合戦略7つありますが、商工会議所としてはやはり4番の「働く」ということが役割としてあるのだろうと思います。「働く」のなかの下の方にいろいろ四角で書いてあります。産学連携とか販路拡大支援とか、ここに書いてあることは、いろいろな段階で実は取り組んでいます。ですが、なかなかそれが若い人に伝わっていないというのが実態ではないか。特に長岡を離れてしまうと全く長岡の情報が入ってこない。そこが一番の課題だろうということで、この戦略4のなかでやることをいかに発信して、そして戦略1の若者定着へ繋げていくのか。ここが、商工会議所がなう役割ではないかと思っています。

ある意味、地方創生は人の取り合いになるのではないか。9月に人口減少対策の講演会をやって野村證券の和田さんという方に講演をしていただいたのですが、マクロ的に見ると20世紀は人口が3倍になって、21世紀は逆にそれが3分の1になるのだという話がありま

した。1900年は約4,300万の人口が2000年には1億2,000万、2100年には4,900万台になるという試算のなかで、人口減少そのものを止めるというよりは人口減少を前提とした社会の仕組みなり仕事のやり方を考えて行くべきではないかという意見も一部ではあるのですが、そのなかで、いまやれることは、いまやっていることをいかに発信していくかに尽きると思うので、この辺を皆さんと一緒にやっていくのが会議所の役割だろうと思っています。

原田 どうもありがとうございました。会議所は戦略4「働く」で情報発信すること、頼もしいですね。それでは、鯉江さんに、全国のアンケートで、先ほどは時間がなくてあまり話ができなかったと思うのですが、長岡市の総合戦略を全国のアンケート等の観点から、どんなふうにも評価できるかお話しただけだと思います。

●非正規雇用者賃金をアップし結婚を増加させることができるか!

鯉江 基本的には、先ほども言いましたけれども、長岡市が特に特殊なことをやっているわけではなくて、全国で既に色々やられていることを長岡版総合戦略自体は合致していると思います。まさしく同じ向きである。

質問から話を変えたいのですが、今日配っていただいたところに、長岡市の人口の将来変動というものがあります。合計特殊出生率を現在の1.5から2.19にもっていく。それによって人口減少を食い止めるというのが計画されているのですが、実際よく考えてみると、いまの人達、例えば1.5から2.2とすると0.7です。全員が0.7人余計に生まなければならないという話です。これは絶対無理だと思います。極端なことといえば、いま2人生んでいる人達が、全員3人生まなければならないという話になります。

よくよく考えてみると、正規雇用と非正規雇用を比較すると、現在、非正規雇用がものすごく増えています。非正規雇用の場合には給料が安い。したがって結婚もできない。日本の場合は中国と違って男性と女性の数がほぼ同じです。女性の方が少し多いのですが、これは高齢者が多いだけですから、ほぼ同じなわけです、若者については。そうすると女性に一人余計に

産んでくださいということは現実には無理でして、産む人の数を増やさないと駄目なのです。そうなれば、これはできないとは思いますが、長岡の企業が例えば一人正規雇用を雇った場合に非正規雇用分との差額を補償してあげる。そうしたら皆長岡へ来て働きます。そして皆結婚してくれるようになります。そういう政策を打つ、そういう方向に持って行って人口を増やして元気になっていくということしかないのではないかと思います。

私自身も正規雇用で21年前に移住してきた男子ですので、長岡が気に入って1年で家を買って、やっと来年3月に住宅ローンが終わるので、これからは長岡でいっぱいお金を使おうかと思っていますが、そうやって人口を増やしていくということが非常に大事ではないかと思えます。

原田 その点は後でまた議論したいと思えます。それでは、第2のクールに移りたいと思えます。地域活性化にはどんな事業、活動が必要か、のぞましいか。

栗原さんは東京から長岡に移住した、長岡にとっては人口の社会増にあたります。そのときに情報発信が非常に重要だと言われた。良いことを言っても発信できなければ駄目だと言われた。まったくその通りだと思います。先ほどの移住女子のサミットのように、長岡のいまの若者会議とかを見ていて、もうちょっとこれはこうした方が良いのではないかというアイデアはありますか。情報発信。若者だけではなくても良いのですが、地方創生も長岡のものをいろいろなところ知ってもらわなければ人は増えないわけです。何か、いいアイデアがあれば。

●見られるホームページ、長岡の魅力を具体的に発信!
-地方の魅力のリストを発掘-

栗原 私が思い浮かぶのは、1つはホームページというのがあるのですが、いまの長岡市のホームページは絶対に見ないだろう、それで広報しても意味がないだろうというのは正直に思えます。2つ目は交流という点をつかいて、移住女子も、ただ地方へ行ってフリーペーパーを出して発信しているだけではなくて、実際に東京に何回か通っているのです。そこで実際に移住女子はこんな生活をしています、こん

な考えをしていますというのを発信して、地域に興味を持っていただく。そして、是非、新潟に行ってみたいですという声をたくさんいただきます。

先ほどの鯉江さんの話につなげてしまうのですが、私達が「移住女子予備群」と呼んでいる、地方に移住したいけれどもきっかけがない、どこに行きたいというわけでもない、でも地方に移住したくて東京での暮らしがそろそろ飽きてきたという20、30台後半くらいの女性までいらっしゃるのです。私達がびっくりするくらい。先日開いたイベントでは、30、40名定員のところを60名くらいの女性が来たりとか、本当に東京の女性達はそういった情報を求めている。そういった移住女子予備群がいっぱいいるのに、うまく地方の男性とのマッチングができないだろうかとずっと思っていました。その1つに、長岡の若者会議のなかでも、「農的男子図鑑」と名乗っているプロジェクトがあるのですが、長岡の、田舎暮らしだけでも格好良い暮らし方、生き方をしている男性達をフリーペーパーで紹介しようというチームがあります。

そういったふうに、長岡で活躍している、地味だけれどもがんばっている男子をどう見せるかというのも情報発信の1つだと思うのです。そういったものと、移住女子予備群をうまくマッチングさせることができれば、人口増にもつながるのではないかとも思えますし、それに合わせて鯉江さんがおっしゃったように雇用も大事な話だと思うので、男子がいつまでも元気に働ける、地元のある人達が元気に暮らしていける基盤もつくっていただきたいと思えます。

原田 中村さん、この辺どうですか。総合戦略のなかでいうと、重点になりそうですか。

●交流づくりの工夫で若者定着へ!

中村 厳しいご意見ですが、ホームページをはじめ私どもも情報発信について強化する必要を感じております。また、いまの交流のやりかたを考える必要もあると考えております。栗原さんが言った通り、来てもらうための情報発信も必要だし、若い皆さんを中心に、20代、30代くらいの方が出会う場、あからさまな婚活ではなくて、何らかの共通した目的、例えば、移住とか、趣味であったり、そういう出会ったり交流

できる機会をどんどん増やしていければなと思っています。戦略1「若者定住」と戦略5「交流」をうまく組み合わせる成果をあげる、そういう方向で今後取り組んでいきたいと思っています。栗原さんのご指摘はまさしくその通りだと感じております。

原田 本当は時間があれば、そういう移住女子予備群は本当にそんなに居るのかと質問をしたいのですが、これはやめることにしたいと思います。大森さん、どうですか。若者会議、情報発信をどうするか。

大森 やはり若者会議なのだから若いやり方をしたいと思っていますし、12月1日にいよいよ後ほど出てくるのですが、若者仕事機構がたちあがると同時に、若者会議もそれを拠点にして動き出しますので、随時我々総出で、もちろん長岡市も、オール長岡で発信するしかないでしょうね。

原田 栗原さんが鯉江さんの賃金、給与の話をしていましたが、鯉江さん、情報発信とかアンケートで参考になりそうなものはありましたか、あるいは個人の意見でも良いですが。

鯉江 今日の資料のなかで、長い表があったと思うのですが、それを見てもらうと、結構やはり女性支援だとかそういうものに対して反応しているのです、人口が増えているところは。そういう部分が大事になるのではないかと思います。

原田 どうもありがとうございます。それでは次に小柳さんと長谷川さんに、小柳さんには、いままであまり産学官とって金が入っていませんでしたが、最近入るようになりました。金融機関としていま地方創生というので、実際どうのことをホクギンとしてやられているのか、ご紹介をいただけますか。

●地域資源活用型の新規事業を支援!

小柳 実は金融機関も本当に昔から産学官連携をかなり真剣に取り組んできています。今日は皆様に配布させていただいたパワーポイントの資料をごらんになっていただいて、3分くらいで事例をお話しさせていただきます。

金融機関としての立場で、なかなか婚活に対して合コンを開きましようというわけにはいきませんので、我々としてできることとは、産業の育成が中心になります。産業の育成も、実は

既存の産業もさることながら、先ほど課長からも話がありました通り、新しい産業を創出して、そうした新しい産業にいかに関係を増やしていくかというところに着眼点を置いた支援が大切ではないかと思います。これが基本です。より具体的には、地域経済循環創造事業交付金と新潟県戦略産業雇用創造プロジェクトの2つの支援策があります。前者の交付金は、総務省管轄の補助金事業として、地域の資源を活用して新しい産業を創出する場合の助成事業です。具体的には、長岡市と連携しまして、昨年から今年度にかけて3つの事業を支援させていただきました。A社が、収集してきた枯れ葉を利用してもやした熱エネルギーと電気エネルギーを活用して植物工場をたちあげます。B社はいわゆる廃棄処分になる可能性のある規格外野菜を活用して新しい商品、長岡のブランド化になるような新しい商品、ディップソースをつくり出すという事業。C社は、米粉を活用してクッキーをつくる。ただしこのクッキーについては、いままでもたくさんの米粉事業を新潟県内で行っているのですが、アレルゲンフリーという食品で、保存食と児童のアレルギー対策としてのおやつ代わりですね。以上の3つの事業に対して申請をあげて交付金をいただいた事例です。もちろんここに雇用もつながってまいりました。

●六次産業化事業も支援!

小柳 次に、銀行はどうしても融資する際に担保をいただくケースがあります。担保は、通常は不動産が多いのですが、新しい手法として、ABL、Asset-based Lendingという金融手法を活用させていただいたという事例です。つまり、事業そのものを銀行として評価して、商品在庫や売掛金などを担保にして、融資する手法です。今回は、長岡が発祥の地である錦鯉事業を錦鯉を担保にして金融支援をしました。この事例は、錦鯉をさらに世界に発信しているというブランド支援という位置づけで取扱いさせていただいたという事例です。

さらに、六次産業化応援ファンドという新事業支援事業があります。新潟市の事例ですが、肉牛農家がステーキレストラン・焼肉店を展開する六次産業化支援事業です。新会社設立をしましたが、その新会社に対して銀行は融資とい

う形ではなくて資本参加、出資させていただいて、大きくビジネスを展開していただきたいというところですか。

まだ実はお話をさせていただきたい点は多々あるのですが、冒頭申し上げました通り、新しいビジネスに対して銀行も積極的に支援させていただいているという、これが働く場を確保するところにつながるのではないかという思いで取り組んでいる次第です。以上です。

原田 支援は具体的に何をしているのですか。つまり、企業が、私のいままでの経験では交付金の申請書を全部書けるなどとは思っていないのです。それを北越銀行が書いてあげるといことですか。

小柳 ほぼ100パーセントこちらで申請手続きをさせていただいております。

原田 戦略4「働く」で、産業に焦点が、雇用のところで当たるわけですが、商工会議所の、先ほどの長谷川さんの話でいくとU・Iターンも同様なのですが、会員企業が新製品開発やブランド品を開発するとか、そういう成長戦略をとることによって雇用を拡大するとか、賃金も上がるということになって、それがひいては長岡の産業の魅力をつくるということになると思うのですが、その辺についてはどうですか。

●企業のビジネスチャンス(販売促進)を拡大する!

長谷川 実は先週も幕張メッセの展示会に会員企業11社が出典しました。これは鉄道の技術展という、鉄道関係の展示会、車両とかそこに使われる部品、そういったものの展示会です。長岡には11社も、鉄道関連製品の企業があるのかと思われるかもしれませんが、必ずしも直接関係がないものであっても何か使えるものがあればということで出展しています。例えば、鉄道でもし事故があったときに緊急時の脱出シートをつくっている会社ですとか、鉄道関連でビジネスチャンスを見つけるために参加しています。NPO法人長岡産業活性化協会NAZEというものづくり企業の団体とも連携しながらいろいろな形で仕掛けていきたい。

企業にチャンスを与えていこうというのが我々にできる場づくりになると思います。お手元の、「ながおか野菜クオーレ祭り」というチラシをご覧ください。これもそういった企業の

販促支援の1つの場をつくろうということで計画したものです。明日、明後日、ハイブ長岡で開催されるながおか野菜クオーレ祭りです。左上に小さな字で書いてあります、「伴走型小規模事業者支援推進事業」と。実はこれは国の事業で、補助金をいただいて実施しています。国の方向性としては、いままでは企業の成長・発展、やる気のある企業を支援していこうという流れだったのですが、昨年、一昨年くらいから、小規模事業者、小規模の定義は従業員数が20人以下、商業・サービス業だと5人以下という企業が継続できるように支援するのが商工会議所の役目でしょうということでこの事業の補助金化ができています。ここには70社と書いてあるのですが、実はこのあと増えて79社が明日ハイブに出展されます。野菜そのものを扱っているところだけではなくて、例えば神楽南蛮の味噌漬けですとかジャム、長岡の野菜のソーセージ、いろいろなところが出ますが、その目的はそういった企業が販売促進につながるように、そういう場をつくろうというのが商工会議所の使命であると捉えて、特に小規模事業者ということは今後国の方向性のなかで強化していかなければならないということなので、先生がおっしゃるように先端的な企業の支援ももちろん必要なのですが、広くあまねく小規模事業者も支援していくという方向性でいます。

●創業者クラブで成長企業を育成!

長谷川 あともう1枚、お手元に「創業者クラブ」というチラシが入っています。これも今回の総合戦略のなかには創業支援がありますが、その一環でもあります。昨年から創業者クラブを立ち上げて、参加費無料の会員制組織になっています。いま45名のクラブメンバーがいます。おおむね創業5年以内の経営者と、これから創業しようという方もなかには入っています。なぜこれをたちあげたかということ、創業までは色々な支援があっただけ着けるのだけれども、その後なかなか商売を続けていくのが厳しいという実態があります。ですからこういうクラブをつくって8月以降毎月1回会合を開いて、金融機関からもご支援いただきながら銀行との付き合い方とか、実際経営に役立つような中身を、皆で集まって勉強しよう。創業者といっ

でも、いろいろな年齢、業種も様々なので、なかなか相談する相手もないということも悩みとして聞いていました。ですからこういった場に出会った方々といろいろなことを相談しあいながら商売がうまくいくようにという狙いがあります。いろいろなネットワークをつくるのが商売の広がりにもつながるだろうということでこういったものをたちあげて運営しているわけです。

ですから、商工会議所としてはいろいろな、小企業、大企業いろいろあるのですが、それぞれ魅力のある企業をつくるのが若者にも伝わり、ひいては若者が定着するまちになればと願っております。以上です。

原田 ありがとうございます。大森さんは経営者なので、経営者として活性化のポイントがあれば一言お願いします。

●技術継承の人材育成の仕組みに支援を!

大森 では、大森木工の代表で話をしますが、私の会社もそうなのですが、技術の継承が出来るのだろうかというところがあります。木工業界でも熟練工が不足しております。中核層が抜けておまして、技術を継承していくのはどうしたら良いか、私も常々、頭を痛めております。なかなかいいアイデアが出てきません。例えば、資格取得や研修などの大会など、様々な業種であると思うのですが、そういったものに関する支援・助成があるとありがたいかなと思っております。資格を取得したり、大会で優勝、受賞すると、若い子達も、実力が身について自信になります。

原田 どうもありがとうございました。それでは3番目、ながおか・若者・しごと機構で主に何をやるかという点に移りたいと思います。最初に、中村課長に、当面まずどこら辺をやりたいか、例えば3つとか簡単にご説明いただけますか。

●ながおか・若者・しごと機構の立上げをしっかりと!

中村 ながおか・若者・しごと機構という名称で活動をしたい。まずは、プレイヤー側の話として、若い方々に集まっていただいて、自由な発想で自由にやってもらいたいというところ

で、若者会議を立ち上げています。先ほど、参加されている大森さんや栗原さんのお話がありました。この活動からくるものを、良いか悪いかは別として大切にしていきたいというのが1点であります。

2点目は、事業支援のオール長岡の体制をつくりあげたい。ある程度、見えているのですが、3大学1高専15専門学校、商工会議所、商工会連合、長岡市、北越銀行や大光銀行などの金融機関さんも含めて、オール長岡で設立したい。ある程度設立に向けて、いいところまで来ているので、そういう活動からやっていきたい。

3つ目に、事業的には、まもなく1つ2つ出てくるのですが、若者会議の皆様、先ほどからプロジェクトという表現が使われていますが、そこから出てくるもの、取りあえず出来るところから一生懸命、成功するか失敗するかは別としてやっていければと思います。当面、大きく2つ、3つを、今年度でしっかりやっていきたいと思っています。

原田 どうもありがとうございました。私の疑問を1つさせていただきます。長岡市は総合戦略づくりと同時に総合計画も策定しました。鯉江さんも総合計画のメンバーですが。人口減少は5年で止まる、解決するという事はあり得ない。かなり長い取組になる。そうすると、総合計画と地方創生の総合戦略の関係はどうなるのでしょうか。事業を継続するためにはどうしたら良いか。お考えがあれば、お願いします。

中村 いきなり総合計画との関係といわれても皆さんの頭が混乱すると思うのですが、いま言った総合戦略はしっかりやっていく。その上でいま検討しているのが、総合計画というもう一つの大きなまちづくりの計画です。それが今年度終了しますので、総合戦略も踏まえ、今後きっちりと関係の皆さん、議会の皆さんと議論をしながら、今年度のなかでつくっていききたいということです。

原田 ありがとうございます。あまり時間がありませんから、パネリストの方、若者を中心に進めるとのことですので、具体的にこういう事業を当面やろう、はじめようというアイデア等あれば一言ずつお願いします。大森さんから。

◎若者が<僕らの街だ!>と言えるように!

大森 若者会議は5グループに分かれていますが、1つのグループは、雪と食に関して提供する場をつくるという取り組みです。雪のデメリットをメリットに変える、長岡の野菜を使うという形で、冬の時期に行いたいと言っています。ですから1月か2月か3月かというところで、長岡市内で必ずやってくれると思います。

2つ目は、農的男子のグループです。先ほど栗原さんがおっしゃっていますが、そちらも着々動いておりますが、それがどこまでいったのかは私も分かってはいないので、後ほど発表になるのではないかと考えています。

3つ目は、子育て支援のグループです。ママさん達が集まって子育てに関して情報の一元化等をつくりはじめています。形としては、流動的に動くのかなと思いますが、どこが決着なのかは私では分かりませんが、それはそのグループで動いております。

5つ目は、企業と若者のネットワークづくりのグループです。12月13日に、東京と長岡から1人ずつ、起業家をお招きしてお話します。そこに若い学生等をたくさん呼んで、アオーレで行いますので、是非興味のある方はまた見に行ってくださいと思います。

4つ目は、居場所グループです。これは私が代表をしています。若者の居場所、何があるのかという話で、学生からも、長岡では遊ぶ場所がない、僕らの居場所がない、いろいろなことではじまりました。あまりにも範囲が広すぎて、どうまとめて良いかは正直分かりませんが、12月1日に、我々の拠点の改装を行います。デザインは長岡造形大学の教授のチームが行い、パークという学生の団体がつくれます。昨日も朝9時に、私も立ち会いまして、どのように行うかを話し合ってきました。そのなかで、若い人達は皆さん笑顔、聞いてあげてください。どんなものがおもしろくない、まちを歩いていておもしろくない、どうしたら良いですか。各所にアートを置く、そういった自由な発想からはじまっています。ゲートボール場が余っているのがたくさんある。ではどうするか。スケボー場にしたいとか。自由な発想を引き出す係が私の役割かと思っております。どうせ無理だよとか、そんなのできないよ、と言うのではなくて、

皆さんのお力を借りて、できるにはどうしたら良いかということをお話させていただいて、1つでも2つでも必ず前向きに、若い人達が、僕らのまちだ、と言えるような世界にさせていただけるとありがたい。そのために総ての力を使います。

原田 どうもありがとうございます。是非力強く進め、情報発信ができるように。

大森 すみません、いまの話とちょっと違いますが、今週日曜日に石破大臣が視察に来られました。私もそのお昼に同席させていただきました。石破大臣が、鳥取県出身なのですが、日本海側の地方は、皆上からの圧力が強くて子ども達が全く育たない環境なんだよねという話をしたのですが、そのなかで長岡市はちょっと違う。大人も子どもも、男も女も、皆好きなことを言いながら、まちのためを思っている。まちを愛している。長岡市を愛しているというのがすごく伝わりました、という話をしていました。

原田 どうもありがとうございます。栗原さん一言。

◎諸先輩との連携で若者のアイデアのブラッシュアップを!

栗原 みなさま、長い時間ありがとうございました。その場で、石破大臣には、本当にそういったことをおっしゃっていただいて、長岡市は市民力があるとおっしゃっていました。私もNPO法人の代表をしておりますし、そういうふう感じております。

大森さんの話を聞いていたら、何を言おうとしたのか忘れてしまいましたが。私も若者会議の一員として、食のチームに入っています。ただ、2月20日にイベントだけをやるというのではなくて、そのイベントを皮切りに、長岡の観光産業をつくっていかうと思っています。他のチームがどんな活動をしているかというのは分からないのですが、若者自体も、今後の長岡の未来を考えて動いているということを皆様に気に留めていただきたく、またその若者会議でいろいろな自由な発想で、大人からすれば、馬鹿者と言いたいようなアイデアもあるかもしれませんが、それが若者の特権です。その視点が今後長岡を救うかもしれない。ぜひ、長岡の諸先輩方、いまいらっしゃる方々からご意見をい

ただきながら、若者のアイデアがブラッシュアップされて、長岡をより良いものにするのではないか。それが長岡のリジューベーションではないか。相互にとって若返りというものが、そういった関係性の中で生まれるのではないかと思います。

いま、中村さんがおっしゃったように、市長も自由に若者会議はやってくれと言われるのですが、自由ななかにも、なかなかやりづらい部分とか、自由すぎてなかなかまとまらないといったこともあるので、ぜひ、大人の皆様、私も大人ですが、諸先輩方のご意見もいただきながら、すばらしい長岡をつくってあげたいと思います。ありがとうございます。

原田 ありがとうございます。それでは小柳さんお願いします。

●若者主役で「ながおか・若者・しごと機構」を盛り上げよう!

小柳 長時間ありがとうございます。私どもは、先ほどお話をさせていただきました通り長岡市様とは包括連携を締結させていただいている関係で、様々な関係をつくっていますが、若者・しごと機構は大変すばらしい取組みであると私ども銀行としても考えております。

皆様ご存じの通り、長岡市内には日本を代表する米菓メーカーがあったり、新潟県内を代表するゼネコン本社であったり、またものづくり産業が集積しています。人口減少に対応していくためには、新しい産業の創出、創業やベンチャー企業の支援をしていく必要があります。いわゆる内発型の産業振興が不可欠です。その点で、若い世代の方々の意見が必ず重要になってくるのではないかと考えております。

ながおか・若者・しごと機構では、若者の皆さんが主人公になっていただき、金融の立場から言わせていただきますと、企業と学生との交流の場をもう少し考えていただきたいな、であるとか、学生向けの創業塾であったり、3大学1高専15専門学校の皆様が主体的に学生の学生による学生のためのまちづくりサミットを開いたり、とかを進めていただけたらと思います。さらに、就職してからの生活環境として、若者の住宅環境整備について考えていただく、子育て・育児の面への若者の皆さんのご意見をだし

ていただく、などをやっていただけたらと思います。

若者自身が、私達にない柔軟な発想をもってこの機構を盛り上げていくことこそ、長岡市の地方創生、人口減少に歯止めをかける1つのきっかけになるのではないかと思います。私ども金融としても、できる限りのご支援をさせていただくつもりです。本日、午前中発表させていただきましたが、そのような観点から、私ども北越銀行からは、ながおか・若者・しごと機構に1名行員を派遣させていただいて、共にこの機構を盛り上げていこうと考えております。以上です。

原田 どうもありがとうございます。それでは商工会議所の長谷川さんから。

●Uターンを把握する仕組みづくりを!

長谷川 2つあるのですが、1つはU・Iターンのことです。そもそもUターンの割合がどのくらいなのかという実態も実は分からないというのが現状です。高校卒業後の進路はだいたいわかりますが、大学に進学した人が卒業後どうなったかはわからない。これが、実態です。いろいろなハードルがあるのかもしれませんが、ぜひ、Uターンの比率を把握していただきたい。そうでなければ成果は見えづらいと思います。感覚的に3割か4割かなという、皆さんの同級生等を考えるとそういうのはあるのかもしれませんが、実際のところが分かっていない。全数は無理でも抽出で比率だけでも分かれば、成果がはかりやすくなるのではないかと思います。

それから、Uターンそのものについてです。実は非常にハードルが高い。そもそも中途採用というかたちになります。Uターンには2種類あって、新卒でUターンと、あとは30代、40代になってからUターンという2つあります。後者は把握するのがなかなか難しい。そもそも企業にそういう採用枠はありませんので、よくわかりません。その辺は仕組みをつくる必要があるのだらうと思います。商工会議所も協力できる場所はしなければならぬと思うのですが、そこができないと、いくらU・Iターンを促進しようと言っても言葉だけで終わってしまいます。今後、若者・しごと機構でも検討いただきたいと思います。

◎学生スポーツ大会など学生が交流する仕掛けづくりを!

長谷川 もうひとつは、先ほどから話がありましたが、3大学1高専15専門学校がり、数千人の学生がおります。であれば、何か学校代表のスポーツ大会をしてはどうかというアイデアが出ています。学校対抗でも企業対抗でも良いのですが、何か多くの人を巻き込めるような仕掛けが必要ではないか。大森さんも栗原さんもリーダーとしてがんばっていただいて、お2人はその道のリーダーですが、一般の人達も巻き込むような仕掛けを是非お願いしたいと思います。やることがない、おもしろくない、居場所がないという話がよく出ますが、そうであればそういう場所をつくるのも1つの手だと思います。

また、例えば子ども達に勉強を教えるとか、スポーツや音楽をそういう若い人が教えることで、地域にとって若い人が重要かつ溶け込んでやりがいをもつという仕掛けもできるのではないかと考えています。是非、若い方は自己アピール力とかセルフプロデュース力は我々の世代と比べて高いと思うので、そういう優秀な個の力をいかに地域としてまとまりにしていこうかというところがポイントではないかと考えています。よろしくをお願いします。

原田 どうもありがとうございます。もうほとんど時間がありません。鯉江先生、何かありますか。

◎若者がやりたいことで「世界一」の世界づくりを!

鯉江 これは名前が決まってしまったのですが、できれば「ながおか・若者機構」にしてほしいですね。仕事なんて入れるから真面目に考えなければならなくなる。長谷川さんが冒頭言われたことは非常に大事でして、水飲み場へどうやって連れて行くのか。自分で水飲み場へ行く人達は良いのですが、そうではない若者がものすごくいる。その人達をどうやって連れて行くのかという仕掛けが大事ではないか。スポーツという話がありましたが、それも私はいいと思います。

もう1つ、大森さんが言われた、できるかどうかは問わないで並べてみようというの、ものすごく大事だと思います。おっしゃるとおりですが、大人が入ると、そんなこと言ったって

ね、という話になる。去年うちの学生が、小千谷の中心部から駅まで歩いていったのです。冬の雪はどかすから道路なんですよとか言われてしまったのですが、そんなの良いではないか、一度どかしておいてもう一度戻せばという話。そういうことはできるし。小国では、雪上バイク大会をやりました。これを優勝すると世界を制する。だって、世界中でそこしかやっていないから。

私は、例えば、長高は都会では少ないです。ものすごく人気があるのです。誰が見に行くか分かりますか。お母さん達は、息子が裸になる。川越高校はウォーターボーイズで、長岡は長岡版トライアスロンをつくりましょう。雪を走ったりスキーをしたり、海で泳いだり、山を登ったり。そういうことをやれば皆がついてくる。それで世界一になるのだという形を、何か夢としてもっていただきたいということで、お願いします。

原田 それでは最後に中村課長、いかがですか。

◎縦割りを排して＜連携＞へ!

中村 まず、「ながおか・若者・しごと機構」を「ながおか・若者機構」に変更するのご意見ですが、名前を変えるのは勘弁してください。

皆さんの意見を聞いて、1年近く地方創生で取り組む中では、やはり連携が一番難しいと考えています。言葉で連携というのは簡単なのですが、それは非常に難しいと感じます。例えば、私の場合ですと、北越銀行とか、普段、金融機関の方とはつきあわない部署です。3大学1高専の方々とも、本来でいうと連携協定があるのですから連携に問題はないはずですが、15専門学校の方々とは今回初めてお会いしようということになった。大森さんをはじめ、栗原さんのような若い方々と意見交換をするというのはもっとはじめてです。

参加者の皆さんにそれぞれの立場や事情があるように、私ども市役所も公平という部分での仕事をきっちりとやっていく一方で、地方創生のアイデア出しでは、関係の皆さんと行政分野の縦割りの壁を越えていかなければならない。地方創生では、例えば福祉保健部と商工部、あるいは教育委員会、農林部が1つになって、はじめて効果が出てくるのではないかと気が

します。若者や関係機関の皆さんを含め、「ながおか・若者・しごと機構」が議論できる場になれば良いかなと思います。

◎参加する学生を増やす仕組みが大きな課題!

原田 どうもありがとうございました。最後に、一言申し上げたい。私の大学で、学生と話をしていると、先ほど鯉江さんが言われた、学生が若い人が積極的にやるようにするにはどういう仕掛けをつくるかということが、「ながおか・若者・しごと機構」で若者中心にとったときの最大の課題ではないかという感じがしています。ですから、長岡大学の学生も、新潟から通ってきている学生もいますが、うちの大学にきているだけであって長岡を何とかしようという意識はまったくない学生も多い。そういう若い人達が多いのではないのでしょうか。そういう意味では、若者が7000人いるといっても、そのうち何人、長岡のことを考える人がいるのか、という感じです。その壁をどうやって打ち破るかが、この「ながおか・若者・しごと機構」が成長・発展するかの鍵だという感じがしています。最後司会として一言申し上げました。

今日は時間を過ぎてしまいましたが、長時間にわたりましてご静聴いただきまして、どうもありがとうございました。

*なお、最後に栃尾地域の参加者から、「地方創生には、除雪・克雪の取り組みが重要であり、長岡版総合戦略では不十分。という趣旨のご意見があった。中村課長から、「ご意見を参考に、総合計画での記述を考えていく」という趣旨の回答があった。

*以上、文責：原田誠司